令和５年度 第１回 国産材の安定供給体制の構築に向けた
四国地区需給情報連絡協議会　議事録

日　時：令和5年6月9日(金)10:00～12:00
場　所：Web 会議(Zoom)

１．開　会

○司会（福吉　事務局長）

ただいまより、令和５年度第１回目の四国地区需給情報連絡協議会を開催いたします。

開催にあたりまして、当地区会長の本山よりご挨拶を申し上げます。

２．挨　拶

○本山　会長（高知県素材生産業協同組合連合会　代表理事）

木材業界においては、いわゆるウッドショックによる価格の高騰も収束しつつあり、一部ではコロナ前の価格まで下がってきている状況とも見受けられる。

また、依然としてロシアのウクライナ侵攻が収まらず、先行きが見通せない状況が続いている。

令和4年度の新設着工数は 86 万戸と 2 年連続増加となり、木材需給も多少ではあるが増加となっている。

しかし、パルプやチップ及び燃料材の輸入が大きく増加し、全体での自給率は 41.1%となった。木材の国産材自給率は毎年増加してきている状況でもあり、今後は輸入材への依存体質を国産材へ切り替え、輸入材による影響を受けにくくするような取り組みを進めることが重要となってきていると思う。

こうした中で安定した供給体制を構築することが重要視されおり、川上から川下までの幅広い連携強化と情報の共有の一元化が必要となってきているところから、本会議では川上から川下までが情報の共有を図ることを目的として開催しているところです。

本日は、ウェブ会議となるが各分野の構成員の皆様から、それぞれの立場からの現状・実態・今後の見通し等について、忌憚のない意見をいただき、四国地区において川上から川下までの情報共有を図りたいと考えておりますので、本日はよろしくお願いします。

３．議　事

（１）林野庁からの情報提供
（２）木材需給の状況について

○司会（福吉　事務局長）

資料をもとに、林野庁から情報提供をいただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

○林野庁　木材産業課　永島　課長補佐　　資料１～４、参考資料１～６
木材利用課　斎藤　課長補佐　　資料５

について説明。

（３）意見交換

○司会（福吉　事務局長）

いまのクリーンウッド法の改正等林野庁からの説明については、最後のほうでまとめて質問いただければと思います。

本日の座長は、高知大学名誉教授の川田先生にお願いしております。

それでは川田先生、よろしくお願いいたします。

○国立大学法人　高知大学　川田　名誉教授（以下、座長）

高知大学名誉教授の川田です。本日はよろしくお願いします。

それでは議事に入ります。前回の会議は令和５年１月に開催され、建材全般の値上がり等により住宅単価が上がり、特に持家の着工戸数減に影響しているといった状況でした。前年の特に前半の輸入材入荷量の増加や住宅の需要減により、部材によっては流通在庫がなかなか消化できないといった状況も見られ、加えて、為替や木材需要が不透明なことから、見通しの立たない状況を不安視する声も多く聞かれました。

一方で、輸入材リスクが顕在化した中で、国産材活用への期待も一方ではあったと考えられるが、実際に新たに国産材活用が定着したかどうかという点では、本日の皆様の意見の中で具体的に実情を説明いただければと思います。

それでは、これから各事業体の実情について、お聞きたいと思うのでよろしくお願いします。

まず、川下よりお願いします。特に住宅の最近の建築状況や部材の仕入れ、さらに受注状況、今後の見通し等の動きについて、また、国産材の利用等も含めて説明願います。

一般社団法人 JBN・全国工務店協会 会員（株式会社山田工務店 山田　代表取締役）

先ほども話があったが、新設の住宅着工戸数は 68 万戸で、これには貸家・分譲・持ち家をすべて含んだものであり、私どもが得意としている持ち家は、16 か月連続マイナスという状況で、この 4 か月連続で 2 万戸を大きく下回っていると言われている。

これは過去 60 年間で最も低い水準と言われており、戸建ての持ち家についても住宅大手も同様であると思うが、この要因は見えていないが、今後住宅ローン金利にも影響し、新設の住宅需要、特に戸建ての持ち家の需要を増やしにくいのではないか。

私たちのような小規模の工務店は、資本力の大きな大手と同じ土俵に上がっても勝ち目はありませんので、今後どのように事業を見直しするか、再構築をするのかが課題となっていくと思う。

このまま新築を追うではなく、リフォームやリノベーション市場に入っていくことになるが、ここにもライバルがたくさんいると思うので、どうやって生き残っていくのか。個人的には空き家市場を開拓していきたいと思っている。

今後、空き家に対しての支援を国交省、農林水産省、官公庁等の省庁が補助金を充実させてくれると思うので、その施策に則って空き家をカフェや民泊や農泊等の分野に利活用できるようなリフォームやイノベーションをやっていきたいと思っており、そのように市場創造していくのがこれからは重要ではないかと考えている。

あとは、大工が非常に減少しており、これも新建ハウジングからのデータだが、2020 年で 30 万人弱まで減少した建築大工は、2030 年に半減以下の 14 万 5 千人、2045 年に 3 分の 1 以下の

8万人、2060 年に5万人まで減少すると予測している。このままでは従来通りの手法で住宅を建築するのは難しくなる。例えば一人の大工親方としてやっていく場合、初期経費や維持費が高く現状の年収では日本で大工をやろうという若手は少ない。やはり大工がいなくなると、この木造住宅業界はパネル化、プレハブ化するしかないと思うが、リフォーム、リノベーション市場では大工の手は必須なので、私たち工務店仲間では、若手社員、若手大工の育成が必要ということで頑張っていきます。

○川田　座長

これからはリフォーム市場をターゲットにした取り組みが重視されること、一方で大工さんの労働力不足が必然的に近い将来来ることで、これに対する対応を真剣に考えていかなければ、との意見であった。パワービルダーが建築した分譲住宅だけではなく、戸建て住宅をどうやって支えていくかということも今後の大きな課題だと思う。

続きまして、川下領域の立場から、高知県木材協会の小原専務理事に、川下状況、あるいは国産材の需要に対して、どういうふうに供給側が供給システムとして対応していくのかということを含め、お話し願います。

○一般社団法人高知県木材協会　小原　専務理事

まず、需要については先ほどの林野庁からの報告のように、かなり弱くなってきているのが実情です。私どもの会員に聞くと、プレカットに関しては今年1月以降、需要が2～3割程度落ちているので、その分については非住宅でカバーをしている。

製材については、まだら模様になっているが、忙しいところは大手ができないような細かい仕事を取りながら、なんとか回しながらやっているが総じて需要が悪く、2～3割程度稼働を落としていると聞く。ここに来てスギがかなり苦戦しており、スギが売れない状況で高知県内の原木市場では販売に苦戦している。せっかく増産で頑張って来て安定供給に繋がっているが、需要が下がってくると山の方に影響しないかと懸念している。

私ども木材協会では、県内の需要拡大ということで、市町村長及び副市町長と面談し、これから構想段階の公共の建物に、建築士も同行し、木材使用の検討をお願いしている。

また、最近では商工会議所の建物が 50 年を過ぎ建て替えの話があり、民間事業についても同じようにお願いをしている。

県外については展示会等を行っているが、だんだん苦しくなってきているので、非住宅分野への需要の掘り起しに取り組んでいる状況です。

○川田　座長

需要開発において、いろいろな領域へ積極的には働きかけながら、木材を利用していく方向に取り組んでいるとの話であった。川下領域においては前回、建築資材で国産材と外材で平角の価格差が２割あり、スギを利用したいが価格面で難しいとの話があった。新たな需要開発と同時に供給するための、国産材の供給体制をどう作っていくのか重要であると思う。この辺を含んで皆様方から川下対策に対応する取り組み等のあるべき姿なり、うちはこういう方向でやっている等意見があればお聞かせ願いたい。私自身ウッドショ

ックを契機として国産材の供給体制が新たに生まれつつあるのかどうか、この辺の動きをどう探っていくのか、あるいはどう伸ばしていくのか課題になってくるのではないかと思っている。何か新しい動きはありますか。

特に前回、山田様より報告いただいた中で、スギを使おうと思うが外材より２割も高ければとの話であったが、価格が前提となる以上は需要が開発できないのかどうか、この辺も含めて何かご意見はありませんでしょうか。

国産材の供給体制で、特に平角について、大型の専門工場で造っていかないといけないのではないか、との意見もきかれたところです。

○高知おおとよ製材株式会社　遠藤　工場長

現状としては特にスギが売れなくなった原因は、国産材のスギの集成材の安価な価格設定が一番の原因であると思う。現状、スギの柱等と外材は約２割程度の価格差だと思う。ただし、スギの国産材の集成材が売れなく、値段が極端に 1 万円程度違ってきたため、一斉にスギが売れなくなっているのが実情。国産材同士で食い合っている状況が現状である。結局は、国産材の供給がしっかりとしてきて、それに対する住宅着工数が足りていないというのが一番の問題であると思う。

○川田　座長

同じ国産材同士の集成材と無垢材との競合といった問題が起こっているとの話であった。いずれ外材価格が従来通り安く入荷するようになればスギ等の供給問題が変わってくるのではないかと思う。

○林野庁　木材産業課　永島　課長補佐

高知県木材協会様にお聞きしたい。

プレカットがまだ通常よりも２割程度生産が少ないが、その傍らで非住宅でカバーできているとの発言があったと思う。ほかの地区でも、同様の発言があった。とは言え、やはり住宅に対して非住宅は、もともと全体の木材需要量があまり大きくないので、住宅が減った分の一部を少し回復できているイメージと思うが、そういったボリューム的なもので、話できることがあれば教えていただきたい。

○一般社団法人高知県木材協会　小原　専務理事

非住宅をボリュームで２～３割程度は一時的に稼いでいる感じとのこと。ただ、プレカットの方によると、たまたまあったけれども、これが継続するかどうかは分からないと心配されている。ちょうど公共住宅がうまく入り込んだので良かった。高知県のプレカットは住宅をしっかりとベースにして欲しいというのが実態です。

あと、先ほどは話をしていませんが、住宅の面積や床面積がどんどん縮小してきているので、皆さん心配されている。徐々に減っていたが、資材がこのウッドショック後また上がったため、余計に拍車がかかっているようだ。県の住宅、公共事業の担当者に聞いても、最近では床等の面積が縮小されてきており、以前は３５坪が標準だったが、３０坪を標準

へと向けているような話も聞く。需要も厳しさが徐々に増している印象です。

○川田　座長

ほかに何かまだこの川下領域という視点から何か質問や意見がありますか。

一般社団法人 JBN・全国工務店協会 山田　理事（株式会社山田工務店 代表取締役）

構造材の話で、集成材が一般的な時代になりつつあるが、当社として集成材はあまり使用したくなく無垢材でやっている。最近の特に若いお客さんは、割れを特に追及されるときがあるが、以前より割れても大丈夫ですよという説明しかできない。結局は工務店が消費者に説明するしかないので、川上や川中から見たときに、どのように説明したらいいか、教えていただけないでしょうか。

○川田　座長

木材の割れは、一般の方々はなかなかわからないと思うが、この件に関して全体の意見や発言があるときでもよろしいでしょうか。

それでは、次に川中領域について話を聞かせていただきたい。原木の確保あるいは製品の生産状況、需給等の動きはどうか、また、今後の生産体制に対する考え方等について、伺いたいと思う。まず、集成材工場の立場でお伺いしたい。

○株式会社サイプレス・スナダヤ　村上　生産本部長

現在の生産状況について、弊社は、４月から製材を２シフト体制にし、月産はヒノキを２万㎥、スギを４千㎥、合計２万４千㎥の原木を製材している。

一方、市況はそんなに作って大丈夫なのかということだが、市況はやはり落ち込んでおり、特にスギは先ほどおおとよ製材さんからの話のとおり、大分苦戦している。ヒノキは、まだ、幸いなことにスギほど落ち込みは出ていないが、どうも、スギに引っ張られ、ヒノキも安くならないのかとハウスメーカー等から声が出始めているのではないか、少し不安定な状況が現在続いている。

だから、市況よりも弊社の場合は現在生産が勝っている。このまま生産を継続するのか、我々は安定供給を目指しており、できる限り仕入れは止めないよう、山にあまり負担をかけないように頑張っている。

現在、市況は悪いが生産は維持し、製品の在庫を積み増している現状がある。悪い状況がいつまで継続するのか少し不透明なところがあるが、我々はいずれまた秋に向かって需要が出てくるのではないかとの予測のもとに、現在できる限り在庫を積み増し生産し維持していくスタイルで進んでいる。

製品はどちらかといえば、ヒノキは無垢についても集成材についても、スギと比較するとそれほど影響がなかったので、弊社にとっては少し幸いであったとの現状です。

○川田　座長

若干市況の落ち込みという状況にあるようだが、特にスナダヤさんの場合、自社の動き

で市況・需給状況に影響する程の規模ですので、今の話は素材生産の安定供給すなわち加工領域での一定の需給調整により、需要を安定させることを意味し、素材生産業界、流通業界にとっても非常に意味があるのではないかと思います。

○ウッドファースト株式会社　伊藤　代表取締役

現在、弊社工場は、スギが８割、ヒノキが２割の生産状況です。話のように、ヒノキはそれなりに動いている状況であるが、スギは皆様と同様に集成材またはベイマツの値下げにより、非常に動いていない状況です。

生産は、原木が順調に入荷をしており、いつも通りの状況で進めている。ただ、構造材の動きが悪いので、どうしても間柱等の羽柄材、また板材中心の動きとなっている。

今は、受注に合わせた生産をしている状況です。５月、６月は非常に厳しい状況で、プレカット工場の受注状況は若干良くなってきたと話も聞いているが、７月、８月に向け需要が出てくれば、外材の在庫、また国産材の在庫は必ずしも多くはないので、少しその辺を期待している状況です。

課題としては、受注がすごく偏っているので、その生産の仕入れ、または生産のバランスが非常に難しいが、それはそれで、工場のみんなといろいろ工面しながらやっており、もうしばらく我慢の状況ではないかと思う。

○川田　座長

前回、高値の外材、在庫対策として国産材販売が展開していると発言いただいたが、現在は既に外材調整が終わったということでしょうか。

○ウッドファースト株式会社　伊藤　代表取締役

外材の在庫については、持っているものをどう動かしていくのか。あとは、ある在庫も、徐々に値段が下がってきているところや価格の下げ合いもある。

ビルダーで一つ注目するのは、価格重視の動きなのか、または安定供給の方向性なのか、この二つの動きに分かれてきている。外材は確かに価格がウッドショック時のように、入荷が不安定なので安定供給だと、やはり国産材ではないかとの考えを持ったビルダーにしっかりと供給していきたい。そういった、これからのビルダーの動きがあるので、弊社ではお得意様に、しっかりと供給していくことで、これからの施策の展開があるではないかと思う。

○八幡浜官材協同組合　松代　代表理事

現在、国産材ヒノキの状況は、生産は順調に予定通り生産している。仕入れ状況は丸太も順調に入荷している。

プレカットからの話では、実際１０％から２０％減少しているが、構造材、柱土台の注文は、若干増えている状況ではないか。また、外材から国産材へ少しずつ移行してもらっている状況は見受けられる。ただ、その製材の過程で製造される造物等、羽柄材の売れ行きが非常に滞っており、弊社では、その販売や生産をどうするのか、今後の課題となるの

ではないかと思う。

○川田　座長

八幡浜官材さんでは、無垢のヒノキの柱土台角が非常に順調で、価格は若干問題があるようであるが、順調に動いているとの話であった。一方では羽柄材等の売れ行きがちょっと鈍いのが問題だとの意見をいただいた。

全体の流れとして外材価格は下がってきたと思うが、宇和国産材さんにお願いします。

○宇和国産材加工協同組合　井上　代表理事

需給調整、丸太の需給調整、製品の動きもよく分からない中で、スナダヤさんのアンケート調査の意見そのものが正解ではないかと思う。この協議会の中で、もう少し建築戸数の多い工務店さんや、ハウスメーカーの話を聞けるような状況にしないと、山側と製材の議論ばかりしていても何にもならないと思う。

ある程度の情報源としては良いかもしれないが、自分たちの今後の成長、何をしていったら良いのかは見えてこないと思う。そのためには、やはり需要者側の方、一番はユーザーですが、その方の意見を聞きいろいろな議論しないと、幾らおこなっても前へ向いていかないと思う。その点を林野庁さんも力を入れていただき、そういうメーカーをこの協議会の会議に出席していただけるようにしていただいたら、いろいろ皆さんもまた思案できるのではないかと思う。

それと先ほどの JBN・全国工務店協会 山田さんから質問のあった割れの問題は、施主さんによっていろいろあるとは思うが、強度的なことは問題ないと思うので、各県の林業研究センターの方にデータをいただき、説明されたらよいと思う。見た目の割れは分らないが、構造的な部分に関しては問題ないと思う。

それと先ほどスギの集成材の話があったが、結局スギの集成材の販売攻勢で食われたのはスギの無垢材ではないか。

結局、ホワイトウッドとの競争だと思ったら、逆でスギの無垢が食われただけで、実際プレカット工場さんに話聞くと、別にホワイトウッドの使用量は減っていなく、減ったのはスギの無垢が減っただけだと回答をいただいている。

その中で、いろいろ全国的に補助設備があり、一生懸命国産材を使用しようとやっているが、逆に国産材の材料で無垢と集成が何で喧嘩しないといけないというのが正直なところです。その辺をどう考えていくかではないと思っている。

○川田　座長

ごもっともな意見をいただいた。この会議のあり方として、結局何か成果があったのか、という非常に厳しい意見であるが、情報交換というものの情報をどのように、それぞれ参加者の皆さん方が吸収し自分に活用していくのかという面もあると思うが、情報交換や需給関係を検討するこの場では、やはり一定の限界があると思う。

より効率的な会のあり方とするためには、先ほどおっしゃるように、やはり川下のエンドユーザーの領域の方々のバラエティーに富んだ需要を、どう掌握し把握するのかが重

要だと思う。
　林野庁さん、委員のメンバーとして、よりもう少し地域ビルダー・パワービルダーやハウスメーカーといった方々の参加を要請されてはどうでしょうか。

○林野庁　木材産業課　永島　課長補佐
　皆様、ご意見ありがとうございます。
　まず、この会議の最初の目的は、川上から川下までが一同に集り、需給の情報交換をするという目的で始まったものです。構成としては、地域に密着した方々の集まりとなっており、言われたように、いろいろ産業の構造の関係等もあり、また、ほかの地域の関係もあるので、一つの意見として伺い、来年以降会議を開きたいと考えているので、そのときの改善点の一つとして参考にさせていただければと思う。
　あとは難しい話だと思いましたが、同じ国産の中での競合というのは、あまり今までになかった点だと思う。ウッドショック後の新しい動きなのか、その辺の分析も是非皆様にも教えていただきたいですが、また一つ、ここは考えていかなければならないところであり、情報収集していきたいので、また教えてほしいと思います。

○川田　座長
　それでは、次に原木流通の方々を指名させていただきたいと思う。
　原木確保や製品の生産状況、あるいは需要の変化等の状況により、今後の生産・流通体制をどうするのかを考えなくてはならない状況かと思うが、特に木材流通業界に情報提供をお願いしたい。

○大木坑木有限会社宇和島出張所　二宮　取締役所長
　出材は例年と比較し、やや減少で少なめ。樹種別ではヒノキが７割、スギが３割。先ほどからのスギがやはり集成材が食われており、若干売りづらいところもある。特に大径材、スギの３、４ｍ３０cm上の買い手がつかなく売りづらくなっている。
　ここに来てヒノキは、若干であるが、落ち着いた市況となっており、底値を打ったのかという感覚である。
　梅雨に入ったので、今後、若干量原木生産量が減ってくると思っているが、今までは大体梅雨時期に虫害の影響を受けていたが、ここ２、３年は虫害の影響を受けていないが、８月、９月の長雨での虫害の影響を受ける時期があるので、若干市況は落ち込むとは思っている。しかし、その時期に需要が旺盛であれば、また単価をそのまま引き続くと思う。
　生産が安定供給されるのであれば、価格も安定価格で維持されたらと思っている。

○協同組合高知県木材市場連盟　尾﨑　代表理事
　大体のところは、大木坑木さんからの話のとおりで、現状はやはりスギが非常に売れづらい状況が続いている状態。ただヒノキの４ｍに関しては、まだ買い気が少しあり結構動いている状態。
　あと１点、少し気にかけているのが、今後スギが余っていくとパルプ、チップ材等材の

価格の値下げ交渉が始まるかもしれなという話を耳にしている。

現在、スギのある程度の価格は、合板やバイオマス等の下支えがあり、現在の価格が維持できているとの認識なので、ダブついてきて、そういった下支えの価格が下がってくると、やはり皆さんが危惧している通り、スギの価格やそれに引きつられてヒノキの価格も下がるという悪循環が起こるのではないかと危惧している。

先行きについては、少し厳しい状態が続くのではないかと考えている。

○川田　座長

高知県木材市場連盟様の意見では、スギが売れない、ヒノキは動いている状況ですが、全体的に売れない動きの中でパルプやチップあるいは、木質バイオマス用材の価格の値下げも出てくるのではないか。それが一般材の価格に影響するのではないか危惧されるとの意見でであった。

合板等の動きをみると、合板出荷量は大きく落ち込み原木在庫を抱え原木価格も下がってきており、製材品価格に大きく影響しそうである。特に建築用材のＡＢ材以外のＣＤ材と言われる材の流れは素材生産にも大きく影響するし、流通の需給にも影響してくると思う。こういった問題について意見がありますか。徳島バイオマス様に最近の状況をお伺いしたい。

○倉敷紡績株式会社　徳島バイオマス発電所　岩城　所長

状況としては、前回の報告同様、燃料材の需給環境は悪化の傾向が続いており、要因としては、もともと輸入材をメインで計画している大型のバイオマス発電所、あるいは石油、石炭、大型の火力発電所がバイオマスを混焼するケースが増えており、こういう混焼するところも元々は輸入材で計画していると思うが、為替の影響、石油価格上昇による輸送コストの高騰により国産材にシフトしているのが、非常に影響が大きいのではないか。

私ども中小の発電所でも、認定材の比率に関しての課題はあるが、重要なのはその絶対量であり、大型発電所が燃料の種類を１０％変えたら、中小の１００％の量に匹敵するものが、需給環境に影響を及ぼすので、その辺をどこまでエネルギー庁さんや林野庁さんが把握しているのか、あるいは調整はないとは思うが、どこまでその指導ができるのかが大きいと思っている。

アンケートでも、Ａ材の価格が少し下落傾向と読み取れるが、低質材はバイオバス燃料の影響で、かなり価格が上がってきており、価格が上がっているだけではなく、確保が難しいのが非常に問題である。確保が難しいから価格が上がっているのはあると思うが、私ども中小発電所は、材が確保できないと発電もできなくなってしまう。これは四国の地域だけではなく、全国的に同じような状況が起こっている。かなり事業の採算性が取れず継続ができないという発電所が出てくると聞いており、少し大きな話になるが、発電所が再生可能エネルギーの利用促進であったり、脱炭素社会の構築だったりの気運でできすぎているのが正直なところ。

だから、燃料の比率等ではなく、あるいは、ある地域における発電所の件数等ではなく、その量を調査した上で計画する必要があると感じている。

○川田　座長

新しいグリーン成長戦略等の中で、太陽光発電、風力発電、さらには再生可能エネルギー等への資本投資によって、森林の吸収源対策の役割が非常に高まってきているが、木質バイオマス発電は、これまで全然価値がなかったものが商品化されていくという意味において非常に大きな意味を持っていると理解している。

一方、こういった燃料の原料を、いかに確保するかという問題が今度は同じ業界同士で競合が起こっているとのお話であった。

続きまして、素材生産業者の方に発言いただきたいと思います。

○有限会社伊藤林業　伊藤　取締役

近況としては、去年と比較すると、ヒノキは大きく値が下がり、スギは横ばいもしくはやや下落程度でなんとか保っている。先ほどの皆さんの話から、スギに関しては、先行きがあまりよくない状況ではないかと思う。我々も単価が下がらないかと少し不安に思うが、どうしても単価が下がると、山もコストが大分上がっているのでコロナ以降、燃料代や重機等に関しても新車価格が２割程度上がっている。その他の資材等も上がっており、あまり単価が下がってくると増産の意欲が少し薄くなってくると思う。

あと、今年の４月から伐採届が全国一律で厳格化され、今まですぐ伐れていた山が、手続きが面倒になり、すぐ伐れないといった問題も発生しているので、何とか対処方法がないかと思っている状況。

単価があまり下がらなければ、平年並みの生産もしくは増産も考えているが、今後の市況を見極めつつ、これからどうしようかといった状況。

○川田　座長

木材の原木価格も、いわゆるコロナ以前の価格と比較すると高止まりという仮定で比較的生産も維持されてきたと思うが、今の話は、価格はこれ以上どんどん下がっていくようであると、素材生産の意欲、実質的に生産コストが高まっている状況の中で、生産自身に対する意欲もどうなるのか、実態として生産量が減ってくるので、非常に厳しい状況になるのではないかと思います。

○本山　会長（高知県素材生産業協同組合連合会　代表理事）

スギについては、ウッドショック前の単価から言えば高止まりの状況。現場の生産コスト、燃料費、機械類の修理代は、結構価格が上がっているので、実質、高止まりではあるが、そのコストから考えると下がっている状況。

作業員がいるので生産量を減らすとやりにくい。経営上やりにくいところがあるので、経営計画を立てた通りの生産量を確保し提供しようと進めている。

○川田　座長

基本的には、伊藤林業さんと同様に木材価格そのものはそれほど大きな変動はないとしても、コストがどんどん上がっているという意味では、実質的な価格が下がったと同じ

ことになってくると思う。

どちらでも結構ですが、特に民有林、社有林等を軸に対応されていると思うが、この伐採跡地の再造林の問題等について、素材業者としてどういう対応をされていますか。

○有限会社伊藤林業　伊藤　取締役

再造林については、当社では、社有林はほぼ植林をおこなっているが、最近は鹿の被害がひどく、植えたところはもう全滅に近いぐらいやられたという山もあります。あとは、社有林ではない他の所有者さんの山は再造林する意欲がない。木材自体の価格が昔と比較すると、需要も含め落ちているので、山に対し全然興味がなく、そのまま何もせずにおいておきたい、手放したい人が多く、再造林を勧めてもなかなか受けてもらえないケースもあります。

○川田　座長

再造林は、自社有林でほぼ行っているが、民有林の場合は立木を購入され、あとは土地の再造林は所有者の方がやるという前提でお願いすることになりますでしょうか。

○本山　会長（高知県素材生産業協同組合連合会　代表理事）

伊藤林業さんと同様に、社有林については植林をおこなっている。民有林で一般の方の山林では上木だけを購入し、あと再造林の話をするが、現在は木材取引がスムーズにできないので、再造林しても跡の代にそういう無理をかけるので、積極的にしたくないという意見が多い。お金にならないようなものへ手入れ等いろいろな費用をかけられる時代ではないというような言い方で、個人の方の再造林はなかなか難しい状況。

○川田　座長

森林資源は成熟していると私どもは基本的に認識しているが、生産量を拡大するためには従来のような間伐をベースにしていては、なかなか生産量はアップしない。そうすると、どうしても皆伐という方向で対応せざるを得ない。

しかし、皆伐をしたあと再造林をしなければ、林業の継続性を考えたときに問題がある。行政的にも、再造林へ取り組に対して森林・林業基本計画等においては、グリーン成長戦略の中で、伐採から造林保育を通し儲かる森林、収益が上がる林業を目指す取り組みをしているが、実態はうまくいっていないのではないかと思うが、再造林なり伐採後の動きに対して抜本的な取り組みをする必要があると思う。

それでは、最後になりますが、高知大学の松本先生にコメントを含め、総括的意見をお願いしたい。

○高知大学農林海洋科学部　松本　講師

まず、山側では、まだ原木の価格帯はコロナ前よりも多少高めにあり、しかも四国は全国的に見ても高い状況にあると林野庁からお話があった。しかし、素材生産業者側のお話では、物価高によるコスト上昇により材価高騰分は相殺されているという。また、今年か

らは伐採届の境界確認が厳格化され、かなり手間がかかり事業地化をやっていけないという声も別途事業体から聞いている。

製材の方々からは、やはり米国の原木需要の動きの中で、日本の住宅供給側が住宅用材需要を変え、製材側は外材との競争の中で、そういった住宅需要の動向にもかなり振り回されているとのことだった。現状を見ると、スギ同士（スギ集成材とスギ無垢材）で戦っている悲惨な状況にある。山側では国策に従い原木増産をやってきているが、今のところマイナスに動いてしまっている。これはもう国策として山側を動かし、増産を進めている状況では、きっちりと需要側への道を作らないといけない。林野庁もそういった動きには対策を提案されており、効果に期待が持たれるところである。

需要低迷で売り先が確保できてない段階の中で、サイプレス・スナダヤの取り組みは、本当に凄い。需要が落ちる中でも自分のところで山側からの原木流入を止めないように配慮する中で、製材品在庫を抱え今後難しい舵取りをやることを選択されたというのは、コロナ禍でお互いの信頼関係構築や安定供給の基盤を謳われていた精神を体現したもので、今の厳しい状況下でも取り組みにも生かされており素晴らしい。

事前アンケートでもあるように、そういった変動の激しい取り組みの中での課題として、タイムラグを伴う立木ストックではなく、調整弁となる製材品ストックをどこが担うのかが大きい問題で、やはり体力のあるところが持つのが良い。大手ハウスメーカー等が「使う責任」を発揮し、国産材流通の調整コストを抑えるよう働きかけていただければと思う。そうして、国産材を「使う責任」を担わない業者がフリーライドできないような形をしっかりと敷いておかなければ、他が全部の負担を引き受ける厳しい状況が続くのは、国産材流通の今後をより難しくする。

また、先ほど木材協会から、床面積の縮小という決定的に木材利用量が下がってしまいそうな情報があがった。背景には、住宅関連資材の高騰や大工等人件費の上昇などの住宅業界の変化もあるが、施主層の世帯に余力がないことも大きい要因である。その余力部分を作らなければいけない。国策として進められている賃金上昇は、大手よりもまず地方を支える中小の事業体による賃金上昇こそを評価する仕掛けが必要なのではないか。

この他、大工の現状は非常に問題が大きく、現在、高知県の中で４０歳未満の大工がほとんどいない状況と聞いている。ある地域では４０歳未満が０というところもあるとのこと。この場合、近い将来の大工急減が問題なのは、確かにこの先の住宅需要に対してもそうだが、大震災が起きたときに地元の大工がいなければどうなるのか、構造理解力のある大工の減少は住宅復興の力を大きく削ぎ、防災的にも致命的な問題をはらんでいる。このため国内の大工の育成に重きを置く必要があるのではないかと強く感じるところである。

最後に、もう一点、少し明るい話になればと思うが、高知県に新しく育林の事業体が立ち上がりつつある。育林に関し仕事が生まれつつあるのは少し明るい話と思うが、鹿害との戦いは、やはり高知の中で非常に問題になっており、ネットを張り続けるのが本当にいいのかというのは少し検討しないといけない。もっと狩猟側の頭数調整に本格的な投資をやるべきとの思いもある。

今回の意見交換の中であった大手ハウスメーカーの会議参加については、この協議会

の枠組みの状態からメンバーとしての参加は難しいかもしれないが、是非オブザーバーでの参加の検討をいただければと思う。

○川田　座長

本日皆様からいただいた意見に、松本さんの豊富な知見をつけ加えていただき、総括的にうまく整理していただきました。どうもありがとうございました。

本日ご出席いただいた皆様には、いろいろとご発言いただき、取り組みなどもご紹介いただきました。今後の課題解決に結びつくものと思っています。

時間が参りましたので終わりにしたいと思う。どうもありがとうございました。

４．閉　　会

○司会（福吉　事務局長）

座長、誠にありがとうございました。

本日の議事概要につきましては、林野庁のウェブサイトに公表させていただきたいと思います。

それでは、長時間にわたり参加いただき誠にありがとうございました。これをもって終了いたします。本日はどうもありがとうございました。

（以上）